

知ってもらおうこと

中 二一

私は側弯症<sup>そくわんしょう</sup>である。簡単に言うと、背骨が横に曲がっている。

小学校五年生のとき、「モアレ検査」に引っかけた手紙が来た。学校での検査等があっても、手紙が来るのはだいたい歯と目くらいだった私にとって、それは衝撃的なものであった。

母と一緒に整形外科に行き、レントゲンを撮り、親子でドキドキしながら待った。「嫌な予感がする」という気持ちには口に出さずに押し込めて、ただただ真白い床を見つめていた。

しばらくして私の名前が呼ばれ、恐る恐る診察室の扉を開けて、二人で中に入った。レントゲンの写真は、にわかには信じがたいものだった。背骨の真ん中あたりが右の方へ、ぐいんと曲がっていた。そしてお医者さんからこの症状の名前を告げられた。それが「側弯症<sup>そくわんしょう</sup>」である。思春期の女子に起こりやすいと言われる、原因不明の症状だった。

それから検診は何度かあったが、小学六年生が終わりに近づく冬頃、ついにお医者さんから症状の深刻さが説明された。あと少しで手術を視野にいれなければならぬほど、最初のレントゲンより、はるかに骨が曲がっていた。絶望した。四十二度だった。

手術は四十五度以上曲がっていて、成長が完全に終わってからでないとできなかった。しかし、このまま放置して症状を進行させるわけにはいかない。そこで、背骨を真っすぐに矯正させるために、私は装具（俗に言うコルセット）を身に着けて、生活しなくてはいけなくなつたのである。

装具は私の上半身を形どつたもので、遠目に見ると、まるでマネキンのようだった。上下と真ん中、合わせて三つのマジックテープがあり、それを横にある金具に通して、ぐいぐいと引っ張り固定する。かなり力が必要なものだった。それほど骨の曲がり具合が強いのである。ただ、そんなものを身に着けているため、後ろから見て、装具の突起部分が目立ってしまう。私はとにかくそのことが心配だった。側弯症<sup>そくわんしょう</sup>の治療に現実味はあまりなかったのだが、装具を身に着けた瞬間に、そ

ういった不安が私を襲った。これから身体を締め付けられ、苦しみながら生活していくのだろうかという恐怖もあったが、やはり、私は周囲の視線が一番気がかりだったのだ。

私の親も同様だった。母は見た目から陰口を言われたり、いじめられたりしてしまうのではないかと心配していた。母は私のために涙を流した。知人の孫に側弯症そくわんしやうの子どもがいる祖母は

「命に関わることじゃないから大丈夫。」

と言った。母は安堵して、私にそのことを話してくれた。安心した。だが、何より私を心配して一緒に考えてくれた母がいることがとても嬉しかった。

そして中学生になり、私は学校生活で本格的に装具を身に着けることになった。先生方に説明して、少し気が楽になった。抱え込んでいた不安が軽くなったように感じるほど心強かったのである。クラスのみんなへ、担任の先生から私の側弯症そくわんしやうについて話してもらった。肩の荷が下りたような感覚になった。これでみんなに分かってもらえる。変な目で見られない。このときの私は、きつと「受け入れられること」を望んでいたのだ。

しかし、一年経った今、私は本当に求めていたのは「理解」ではなく「周知」だったことに気付いた。分かってもらえることも嬉しいけれど、みんなに知ってもらえるだけで幸せだったのだ。

「理解」の定義は私にも分からない。私も側弯症そくわんしやうを完全に理解できているとは思えない。だが、「理解」は「周知」の先にあり、個人が向き合う複雑なものということは分かる。

「理解」はすることも、求めることも難しい。だから私には「周知」で充分なのである。周りが知ってくれることは、大きな安心感につながるのだ。

誰かに話し、知ってもらうことによって、自分の中のおもりが軽くなって解放されたような気持ちになれるが、反対に自分の中で抱え込んでしまふほど辛くなる。そんなとき、理解してもらうことも大事だけれど、まずは知ってもらうことが一番ではないかと思った。

私の装具も、夏になれば汗がくっついて暑苦しいけれど、冬になると意外と暖かい。堅い素材だから、いつでも身を守られているような気分にもなれる。そんなふうには、辛いこともよかったこと

も誰かに話してみる。それがささいなことでも、  
とても大切なのではないかと今は考えられるのだ。